

春 燈

1
月号

万太郎の句

一句二句三句四句五句枯野の句

句集『これやこの』昭和十七年

先輩から仄聞で、この作品は席題による投句者の発した言葉がベースという。小澤實氏も『万太郎の一句』十二月八日の頁に、俳句で俳句を詠んだ作品としては異様と。

また敦先生は生まれてくる自句を次々に書いて、速度と精気で書きとめ「枯」が死の気配を誘うと。数詞を並べての俳句は、俳句にはじまって俳句に終わった、「天成の本格俳人」これが吾が師なのだと誇りに思うことしきりの昨今である。

小島 禾 汀

万太郎の句

はつそらのたままたま月をのこしけり

句集『流寓抄』昭和三十三年

新しい年が明けた。昨日と同じ日の筈なのに、新年と
いうだけで清々しい気分になるのは何故だろう。多端
だった一年を振り返り感慨に耽る。目を上げると、薄明
の空には下弦の月が淡くかかっている。今年こそ良い年
になるよう願わずにはいられない……

同じ『流寓抄』の〈春浅し空また月をそだてそめ〉は
上弦の月。共に心に残る作品である。

生田高子

西ヶ原日記 (十四)

鈴木榮子

草じらみつけて野袴真田の子
五歳袴着熨斗目紋服嫡子なり
振り向きて霧の妻女山晴るる

天井画鳳凰眼^コを狙ふ鎌鼬
大天井飛弾の工の作業足袋
やつとうの胴小手攻めも寒稽古
制多迦童子丈長毛^ケ布^ツ探し当つ
咳の声耳覚えあり大ホール
戒壇巡り冷えし足摺る真の闇
藩校の庭秋風の七曲り

季節の薫

西谷良樹

喧嘩独楽仲良く打つてゐたりけり
恵方道急な登りとなりけり
桜前線斥候送り出してきし
雀の子争ふことを覚えけり
膨らみて茶山明るくなりけり
小鳥来る十歩で抜ける庭なれど
新涼や咲かせて花の名は知らず
地境に齟齬ある蔦の紅葉かな
綾取の箒くづして上がりけり
しんがりの引き摺る闇や寒念仏

近江秋色

尾野奈津子

近江路の東寺西寺や菊日和
露けしや秘仏の坐せる厨子の闇
吉祥天の朱唇の黙や木の実落つ
定朝仏の真贋談義蛇の衣
放生会鯉跳ねて村さんざめく
小鳥来て勧請縄を揺らしけり
道心の唱名一途残る蟬
雁の棹近江の空を拡げゆく
堂守の晩鐘一打稲の波
月明り片手拌みに辻地蔵

当月集

鈴木 榮子選



○ 久保 久子

緋緘さねの札の傷みや月の弓

葛嵐真田藩校鬨の声

弓道の弦の余韻に秋惜しむ

身に入むや北斎の浪とどろきぬ

長き夜の松代焼の藍徳利

○ 宮地 れい子

石文の大方読めず茸山

イボムシリてふ名もらひて枯れにけり

後ろ手に髪ととのへる文化の日

囀籠四角四面の人とかな

わが生れし町の名消えて小六月

○ 吉田 かずや

上野には故郷の匂ひ北風

縄のれんくぐり手袋噛んで脱ぐ

暖房車眠し乗り越し駅さぶし

入院の夜は旅に似て霜夜寒

炭尉となりしが話まだ尽きず

○ 太田 佳代子

行く秋や人目に触れぬ胸の傷

秋の灯のごとき手紙を賜りぬ

ひとり寝の寝付けぬ夜の秋時雨

銀のスプーン黄味をおびをり秋の暮

雨粒の触れては流る冬はじめ

春燈の句

鈴木 榮子選



秋好日酔牛夢死の終樂章

福島 生方 義紹

母校跡相撲場あたり木の実落つ

柁に空巢の残る秋の雲

花野風なびかぬものに女神像

糞虫のたくまずしての一張羅

新調の眼鏡露の世歪みけり

へプバーンのスクーター駆る文化の日

今日明日を思ふともなく栗を剥く

狂ほしきゴツホのひとつみ秋の燭

神奈川 金子 輝

改札口出づるを待たぬ冬落暉

思ひ込み激しき性や笑昔

亀冬眠夢に兎と談合す

哀号につづくアリラン濁り酒

来る筈のメールまだ来ぬ敬老日

東京 森澤とほる

おとがひのコツと鳴りけり秋果てぬ

広行者天国銀座の隅のちちろかな

咲きをへし木槿や駅の淋しかる

東京 藤田 信義

六本木ヒルズ見上げて秋高し

花展まつ大輪白菊そつと見る

ぼつくりを外輪に踏んで七五三

濃霧なかなにも映らぬ車窓かな

もみづれば伐るをためらふ漆かな

東京 増田 大

納品の疲れ癒さる葛湯かな

初鴨や置き物まがひに憩ひをり

すいつちよを一泊させし夫の靴

岡山 白神知恵子

大根干す振り鉢巻皺深し

ふるさとの彼の山ほろび十三夜

鳳凰と目の搗ち合うてそぞろ寒

余言

鈴木 榮子

囿籠四角四面の人とかな

宮地れい子

四角四面の人とかな―が先にあつて、その人に就いてゆくのは囿籠につかまつてしまつたようなもので、その人の誠実に心からの信頼できる安堵感の表白である。この句の上ではどう解釈しても囿籠の囿はとらわれていることへの居心地良さ、寸分の妥協を許さない誠実極まりない人への心からの信頼感であろう。人生日々の事々の不安、軋轢ほどストレスを招く。時には歳時記の始めから一句ずつ作る位にして俳句を詠んでゆこう。

鯉は息潜めて水の澄みにけり

石橋 公代

古河庭園、六義園共に近い。古河庭園の和風庭園へ下りて池のほとりに行くと鯉が寄つて来る。六義園も同じである。その鯉は息を潜めて池の底に沈んでいるが、池は何事もないうちに静かに名園の佇まいを見せている。池の秋水は鯉を水底に秘めて飽くまでも澄んでいるという写生句で、鯉も一役

貫つて佳句となつた。常々池の橋の上などに立っていると鯉が寄つてくるが、その色、模様の配合に心魅かれていた。黒あり（といつてもグレー）白赤あり、白赤黒とあり、結局鯉もこの配色の配分、色、三色の位置、その色の量などにより値打がきままるらしいので、鯉の専門家はその組合せが出来るよう技術を競っているようだ。

納品の疲れ癒さる葛湯かな

藤田 信義

納品の品が何であるか分からないが、納めた後のほつとした気持が伝わってくる。

作者はもう現職から離れているお齡らしいので、これは納品といつても作者が一肩入れた上での製品で、期限ぎりぎりに納められたものなのであろう。その安堵感で味わう葛湯なのだ。そう思うと締切に追われることは、とにもかくにもしんどいものであつたのだ。

ぼつくりを外輪に踏んで七五三

森澤とほる

七五三のお子様にはぼつくりは履くだけで大変である。それでも自分の晴れの日。頑張らなくっちゃ。

外輪に対して、内輪の最たるものは、「助六」の三浦屋の太夫達の花魁道中、いやが上にも大きく内輪に回して花道を出てくる。七五三の幼子は履きなれないぼつくりである。下手に転んでは大事な晴れ着が台無しである。転ばないように踏ん張る。当然外輪になる。その様子を作者はしっかり写生の目でとらえている。